

日本淡水エビ類の漁法

(続日本淡水エビ類の研究*, 第2部**)

上 田 常 一

(島根大学教育学部)

Tsuneichi KAMITA: Methods used in fishing the fresh-water shrimps and prawns of Japan (Further studies on the fresh-water shrimps, prawns and crawfishes of Japan 1961, Pt. 2)

ABSTRACT. — A glance at a map of Japan shows how rich the lands are in rivers, lakes and lagoons. It is easy to say that all of them contain some Atyid shrimps and Palaemonoid prawns and that these are used by the people for food and fishing bait. At least five methods of fishing these animals are familiarly employed in Japan. 1) The small scoop net known as *tamo* is used by boys and men in shallow water where the shrimps and prawns can be seen. The frame made of fine wire to which the net is attached is round, and 6 cm. in diameter, and is attached at one end of a small handle of about 1m. in length. 2) Another familiar way of catching these animals is by hauling a very large scoop net. (Pl. 1, fig. A) The frame to which the deep bag net is attached is semicircular or triangular, and is firmly attached at one end of a long handle. This net is held close to the bottom where it catches the animals. 3) The *shiba-zuke* consists of a large bundle of tree branches and leaves bound together at their middle and lower parts. (Pl. 1, fig. B) This lowered into the water, and the shrimps and prawns instinctively hide themselves among the branches and leaves. When the bundle is brought to the surface, they still remain attached the branches and leaves, and are then gathered by the fisher laying a scoop net. 4) A fish trap which is used is the *ebi-ue*, a cylindrical basket made of the split bamboo fences and attached a narrow opening as the mouth, through which the shrimps and prawns enter the basket. (Pl. 1, fig. C, D and Pl. 2 fig. I~K) The narrow opening is guarded by pieces of bamboo which point inward and prevent the animals which once entered the basket from escaping. The trap with some bait put inside is lowered to the bottom and allowed to remain in the water, after which the animals enter to feed on the bait, and then the trap is hauled up. 5) Another trap-fishing method is called *bin-tsuri*. This trap consists of a large clear glass bottle with a trapping device at the bottom, viz., a narrow hole points inward forming the raised bottom. (Pl. 2, fig. G) The mouth of the bottle is covered with a piece of cloth, and some bait is put through the hole of the bottom.

* 上田常一 (1961) 日本淡水エビ類の研究, 園山書店, 松江

** 第1部——奄美大島・屋久島・種子島の淡水エビ類 (本論集 第13号)

I. 漁法の種類

日本の土地には河川・溪流・湖沼・潟湖が甚だ多く、そこらの水族には多かれ少なかれエビが交っている。エビは食べてその味のよさと、他方つり魚のよきえさとして古来広く漁獲され、内水面の重要な水産物の1つである。それだけに、その漁法・漁具は地方(産地)ごとに、エビの習性に従いいろいろ工夫されているが、筆者はそれら多くの漁法を集めて分類整理しようとする。

1. 島根県宍道湖における漁法

エビの種類：テナガエビ *Macrobrachium nipponense*

漁場：宍道湖は、周囲およそ 48.4 km、ほぼ東西にのびるだ円形の湖で、東端は大橋川によって中海に通じ、西岸に斐伊川が開口する。水深平均 5 m、最深 8 m に達す。深所は南岸玉湯町島ヶ崎から北岸松江市秋鹿(あいか)を見通した線以西で、最深部は南岸来待と宍道町の界沖にある。湖の南岸は傾斜急しゅんであるが、北岸はゆるやかである。また、中央深部は灰色ないし青黒色の泥土で、それが南岸に向って広く分布するが、北岸部ではかっ色の泥土である。湖岸浅所には砂や小石が多く、所々に岩はだかのぞいている。1 m 内外の浅瀬にはアマモが多く、水深 2 m 内外の所にはヤナギモが茂るが、北岸部はそれら水草帯が広いために、幼魚の生息場である。

漁場は宍道湖のほか、東の大橋川、西の斐伊川下流、南北を貫く佐陀川がある。前述地形や水草のしげみなどから、漁場としては北岸が望ましいように考えられるが、業者数をみてそれが裏づけされるようである。

漁法：「しばづけ」別名「だばづけ」と「うなぎせん」(釜)。

しばづけ：この漁法は早くから、農商務省水産局編集の「日本水産捕採誌」下巻(p. 231, 第 132 図)に紹介されておる。すなわち、「出雲国楯縫郡鹿園寺村先宍道湖に於ける鹿朶漬は専ら川蝦を漁するものにして漁場は陸を距ること僅に 20 間許深さ 2 尋許の処にして漁業に季節なく年中之を為す其装置は雑木の枝のあるもの数本を結束し其周囲をウラジロの葉を以て包み小繩を以て括り之に長さ 3 尋許の繩を付け其端を本繩に繋ぐ本繩は藁にて製し長さ適宜とし是に鹿朶数束を列ね繋ぐこと恰も延繩の幹繩に枝糸を付くるが如くす而して本繩の一端を 1 本の竹竿に括り其竿を水底に樹てて以て繩の流失を防ぎ又本繩に二ヶ所許長さ 3 尺位の丸竹に 3 尋許の小繩を繋ぎ浮標となし以て鹿朶を水中に浸し置くものとす漁法は前記の如く装置したる後夏は 5 日冬季は 30 日毎に小舟に漁夫 2 人乗組み漁場に至り本繩に繋きたる小繩を取り微しく鹿朶を引揚げ其下へ攪網を下し此に集まれる蝦を抄ひ捕り順次斯くの如くして漁獲し鹿朶は元の如く沈め置くなり」と書かれてある。

今もこの漁法に変わりはない、そして、シバの材料は雑木であるが、クヌギやナラの枝が最もよく、ヤナギ・タラノキ・ツバキ・タケの葉などが用いられ、枝先をのこして東のまわりは

前文のとうりウラジロの葉で巻いてある。エビは、あくや油の多い木には、すぐにはつかないと漁者はいう、サンショウの木は逆効果をきたすといて、用いないことにしている。1束の直径は元の方で33 cm, 束の長さは60~80 cm, 3ヶ所で縄でくくられてある。本縄につながる束数は10くらいが普通で、それら相互の間は6 mくらい隔っており、束につながれある小縄は1~1.5 mが普通。しばは、春つけこむのであるが、長くおくと縄がくさるので、10月末にはみんなあげてしまうのが常である。

うなぎせん (筥) : 外形砲弾形 (長円錐形), 口径21~24 cm, 長さ1 m ぐらいある。竹を裂いたもので作り、先端には竹輪をはめて、エビやウナギの取出しができる。[かえし] はせんの入口に1つ, すぐその奥に1つ構える。[かえし] の孔は前方のが大きく, 後方のは小さい。エビは第一かえしだけでよいが, ウナギはこの程度の孔だのにげるから, 孔の小さい第二かえしを併置する。せんの中には, えきとしてシジミを割ったものやカイコのさなぎ, あるいはぬか団子を焼いて入れる。エビの漁獲を目的とする場合には, さなぎとかぬか団子をつかう。かくととのえたせん (うえ) に枝なわを付し, 延なわ (しゅろなわ) に5.5 m ぐらいの間隔で結ぶ。

漁期は春から夏の間が最も盛んで, 1年間おおよそ11万2千5百キロ (3万貫) に達し, 年によって豊凶がある。

2. 島根県江川口における漁法

エビの種類 : テナガエビ (方言 : クマザサエビ) *M. nipponense*

漁場 : 江川は島根県きっての大川で, 遠く広島県に発し中国山地を横切り, 島根県邑智郡に入って7本, 那賀郡に入って1本の支流をあわせ, 江津市で日本海に注ぐ。ここに長さ486 mの鉄橋とそれに平行してすぐしもに人道橋がかかる。漁場は対岸の渡津で, 橋の下方, 海に近い所で, 水深ひぎのあたりまでである。水は透明で底は砂質泥土である。

漁法 : 市販の小さいたも網, 普通[えびたま]というものを, 細長い竹の柄先にとりつけて使う。水深ひぎあたりまでであるところに出て, 水底を裸眼であるいは箱眼鏡でのぞきながら, 網をエビの後方から当て, エビが驚いて網の中に急退すると同時にかきあげる。日中に行ない夜間にやることはない。♂よりも♀が多く, ♀は抱卵している。毎日1人で50~100尾を捕える。

3. 島根県下におけるその他の漁法

ヌマエビ *Paratya compressa* をつり魚のえきに供するために, 大きなたも網や押たも網を持って, ときには水深ももを殲するあたりまで進んで, 水草を押して, エビをすくい取る。

4. 鳥取県東郷池における漁法

エビの種類 : テナガエビ *M. nipponense* とスジエビ *Palaemon paucidens*

漁場 : 東郷池は海岸線に近い潟湖 lagoon である。太古日本海の袋状に湾入してた所が, 天神川のはき出す土砂でとぎされたものである。周囲おおよそ11 km, 水は黄かっ色で著しく不透明, 北・南・東は丘陵でとり囲まれ, 湖水は西北の橋津を経て日本海に注ぐ。深さ約2 m, 底が漏斗状にくぼんだがために7.5 mに達するところがある。

漁法：「えびつけ」と「びんつり」。

1) えびつけ：これは宍道湖のしばづけと同じものである。筆者は以前図らずも、東郷湖漁業協同組合に保管されておる「湖面拝借税之為ニ付願」なる古文書をみるにおよんで、本漁法がずいぶん古くから行なわれていることを知った。東郷池の沿岸8ヶ村民は、明治7年(1874)まで、毎年6石1斗1升7合の税を納めている。翌8年からそれが改められて無税となったが、後年再び課税されるにおよび、明治14年2月森源次郎ほか8ヶ村の総代が連署して、従来の収税額を改めて安い拝借料に引直してほしいと、ときの島根県令境二郎に願い出て却下されている。古文書というのは当時のものなのである。この請願書には、そのころ東郷池でやっていた、魚・貝・蝦・水鳥・藻・泥の取り方20種を巧みに筆墨で和紙に描いて綴ってある。課税種目に当らないささやかな業であることを、おかみに説明しているのである。この絵の中に「えびつけ」が出ている。1人の漁者がが、水底から樹枝様の1束をまさに舟辺にあげているところの絵である。

2) びんつり：透明なガラスびんの大きさは、1升びんほどの大きいもので、びん底にはあげ底をなして内向する落しあながあり、びん口には布切れをかぶせてゴム輪でしばってある。図版2, G) 米ぬかをねらずに、そのままびんの中に入れて水中に落す。水底ではびんは横になり、びんにつけられたひもは、目印に水中に立てられた、葉付の小竹に結びつながれてある。1人の漁者は普通60~70個を使っているから、湖上に小竹が千本のように並ぶ。漁者は早朝未明から舟をこいで、次々にびんを引きあげてはまた沈めて行く。びんをかたむけると、中のエビはびん口に集るから、バンドをはずしてエビを竹かごに移す。スジエビが多いがテナガもはいる。びんは底の大きい方がエビが死ななくてよいと漁者がいう。

5. 鳥取県湖山池における漁法(鳥取県発行「漁具漁法の説明」による。)

エビの種類：テナガエビ *M. nipponense*

漁場：湖山池は鳥取市の西方約4kmのところであり、東西に長くて南北に短い。面積は6.68方km、湖中には津生島・青島・因子島などが散在する。北は砂丘によって日本海と隔たり、南に丘陵、東に低台地がある。湖水は湖山川を通じて、千代川口から日本海へ約3.5kmの距離をもって注ぐ。太古日本海の湾入していた部分が、ここに開口していた千代川によってはき出された土砂のたい積によって、その湾口をとざされた潟湖 lagoon である。

漁法：「大えびたもすくい」と「えびたも」

1) 大えびたもすくい：近年に始った漁法といわれ、湖岸の石垣の下、または草生地へのりに米ぬかを散布し、えさをとりに集ったテナガエビをこれがかぶせて捕えるのである。網は、16番線の針金の円わくに、絹網(20~25節)の袋をつけ、さらに1mのメダケの柄がつけてある。網の目は径1.2~1.5cm。漁期はこのエビの最も接岸する7~8月である。(文献p.20, 図)

2) えびたも：大たも・中たも・小たも・もきたもの4種がある。うち、もきたもの口は半円形、底辺は鉄、半円は竹で囲まれ、これに絹糸21中16本網目25~28節の袋網をとるつける。

漁期は6月1日午後5時から12月末日まで、舟に1人乗り、たも網の引きなわを舟梁につないで、夜間20分間こいで引き揚げ、これをくりかえす。漁獲物はモサエビ（小形のテナガエビ）やテナガエビである。（文献 p. 29, 図）

6. 福井県下における漁法

（主として福井県農林部水産課編集の「福井県内水面漁具の説明」による。）

エビの種類：別にあげてないが、おそらくスジエビ・テナガエビなどであろう。

漁場：福井県の内水面としては、北端の北潟湖と西南方の三方湖である。後者は久々子湖・水月湖・三方湖・日向湖・菅湖が連なり、いわゆる三方五湖といわれるが、このうち淡水湖は南部の三方湖のみである。

漁法：松葉漬と柴漬であるが、前者はさらに2種に分けられる。

1) 松葉づけその1：シュロなわ又はワラなわの先に、松枝を束ねたものを、水中又は水底に沈めておき、エビがここに集って隠れているところを、たもですくいあげる。このたもは口径120 cmのまるいもので、長い柄がついて、とくに「つけあげだも」と呼んでいる。漁期は春から秋の間で、三方湖・北潟湖で行なわれる。（文献 p. 7, 図）

2) 松葉づけその2：松葉を水中に山積に沈め、そこにエビが集って隠れるから、周囲を刺網でとり巻き、中のエビをおどし出して捕える。春から秋の間に両湖で行なわれてきた。

3) しばづけ：方言「ぬくみ」と呼ぶ。この漁法は多少複雑である。竹すを立てて、水面を広く長方に囲み、その囲みの一隅には落しつぼを構える。また、囲みの中には、別に杭を多数方形に打ちこみ、さらにその中へ雑木を沈めて積み重ねる。魚族の集ったところで、舟をこぎながら、雑木を後方から（つぼのある方を先きとする）順次背方に取り出し、そのつど竹すの面積をせばめながら、魚をつぼに追いこむ。漁獲物はコイ・フナ・エビなどで、漁期は主として冬で、三方湖で行なわれてきた。（文献 p. 9, 図）

7. 石川県今江潟及び木場潟における漁法

（石川県水産試験場「内水面利用調査」第1巻による。）

エビの種類：テナガエビ（方言カワエビ、ガマタエビ、コモチエビ）*M. nipponense*、スジエビ（ハシカエビ）*P. paucidens*、ヌカエビ *Paratya compressa*

漁場：石川県の西南端で日本海に接する低地帯に今江・木場・柴山の3潟湖が、 \therefore 状にならんでいる。今江は今江前川によって木場と通じ、今江はまた串川によって柴山と通じ、これらの水は北位の今江潟から梯川を経て日本海に注ぐ。この3潟は、太古日本海の湾入していたものが、海底隆起して口をとぎされたものといわれる。今江は周囲およそ9.9 km、東西2.2 km、南北2 km、木場は周囲およそ5.4 km、東西0.7 km、南北2.4 km、両潟は水底平坦で水深は浅いが、水位の変化が著しく、冬季日本海の荒れる時には、海水が梯川をおしあげて今江に入ることさえあったという。

漁法：四手網・えびたも網・押たも網・「小えび前かきたも網」など。

1) 四手網：網は5m平方，網の四隅には，周囲6cm，長さ1mぐらいのタケを張り，別に2本の木をなわで巻き，十字形に交差したものに結びつけ，さらに，これに長さ4.2mのタケの柄を結びつける。(文献 p. 38, 第5図) 5月から8月下旬まで，コモチエビをとる。これはテナガエビの♀の名で，♂は味がよくないのでとろうとしない。網は全体水中に沈め，エビが網上に集るのを待って引揚げる。

2) えびたも網：長さ3.6mの長い網で，深い半円形の口に長い柄がついている。口わくは木製で，底辺(水平部)は長さ1.1m(幅4.5cm)，彎曲部は2mの木棒を曲げ，その中央から底辺に直角に交る長さ3.6mの柄をつける。これを[床]に垂直に結びつけ，水草の繁茂する所をこいでまわる。漁期は主に10月から翌年3月まで，漁獲物は小エビや雑魚である。(文献 p. 39, 第6図)

3) 押たも網：網口は半円形で，水平部は1.4m，彎曲部は2.5m，共に樹枝で作り，彎曲部の中央から水平部に直交する，長さ5.4mの木柄がつく。2人舟に乗り，1人はさおを持ってみよしに立って舟を進め，他の1人は網を舟の[とも縁]におろし手押しする。漁期は主に5月から8月下旬までと，12月から翌年1月までで，漁獲物は前はコモチエビ(テナガエビの♀)が主で，後はエビや雑魚である。(文献 p. 40, 第8, 9, 11図)

4) 小えび前かき網：網と柄の関係はくわの如くで，かきよせるのに適す。網口は半円形をなし，口わくの水平部は67cm，彎曲部は1mの曲りで，その中央に3~4mの長柄がつく。瀉岸あるいは入江の縁に出て，水草の間を手前に向けてかきよせる。ざるには網ふたがあって，共雑物を除けて小エビのみがざるに落ちる。漁期は10月から翌年3月までである。(文献 p. 40, 第11図)

8. 石川県邑知瀉における漁法

(石川県水産試験場[内水面利用調査報告]第2巻による。)

エビの種類：テナガエビ(方言：テナガガンゾ，デカベンゾウ，コモチエビ，ナツガンゾウ)
M. nipponense, スジエビ(方言：マガンゾウ) *P. paucidens*, ヌカエビ(方言：ガラエビ)
Paratya compressa improvisa

漁場：本瀉は能登半島の基部，七尾平野の西南部にあり，太古海湾であったものが，河川の吐き続けた土砂によって海と隔離されたものである。周囲およそ25.1km，水深1.2m，羽咋(はくい)川によって日本海に通ず。

漁法：[えびすくいたも網]と[つけぶえ]

1) えびすくいたも網：半円形の口を持つ柄付すくい網で，口わくの水平部は長さ1.2m，彎曲部は1.5m，柄は2mばかり，弧の中央から弦の中心に直交し，網の深さ約40cm。漁期は春で，この網で陸上から水草を押してコエビ(ヌカエビ)をすくいとる。(文献 p. 24, 第9図)

2) つけぶえ：巻笹・杉葉・椎葉・ワラビなどをもって，まわり30cm，長さ60cmばかりの束を作り，これに枝なわをつけて水底に沈め，枝なわは幹なわに結び，幹なわの両端は杭に結

ぶ。1人200個内外を用い、毎朝1回静かにひきあげ、下からたも網をあてて、コエビを受け捕える。明治のころには1回の漁獲量3升ないし1斗をあげたという。(文献 p. 29, 第9図)

9. 石川県河北潟における漁法

(石川県水産試験場「内水面利用調査報告」第4巻による。)

エビの種類：ヌカエビ *Paratya compressa improvisa*, スジエビ(方言：ハシエビ, ハシカエビ) *Palaemon paucidens*

漁場：金沢平野の北部にあり、日本海に接す。太古海湾であったものが、諸川の吐き続けた土砂と海風の吹き上げた土砂とによって、海から隔離され、今は大野川によって日本海に通ず。一名八田潟とか栗ヶ崎潟ともいう。周囲27.1 km, 東西4 km, 前述今江潟のおよそ5倍に達す。水底は平坦で、水深浅く1.2~1.5 m内外で、水位の変化は少く、水温は水浅にともない、表面と水底に変化がない。

漁法：えびたも網とえび網

1) えびたも網：半月形の口をした柄付のすくい網である。口わくの水平部は鉄棒で径6 mm, 長さ76 cmあり、彎曲部は径15 mm長さ1.2 mの曲竹で、柄は弧の中央から弦の中心に向い、径24 mm長さ2.1 mの竹棒である。これは昔から本潟湖の南岸八田で使用し、年中やってきたが、盛期は10月ごろという。水温高く風波のない時がよく、舟に1人乗り、水深60~90 cmの潟岸に沿うて、片手でさおをおしながら舟を進め、他手でたも網の柄端をもってすくう。その際たもの柄は舟べりに乗せておいて、柄端を持つ手を巧に上下して、泥中にひそんでいるヌカエビ、あるいは水面に出てくるところをすくい捕える。(文献 p. 115, 図)

2) えび網：海でやる打瀬網の小規模のものようである。網口の左右に2本の引きつなをつけ、1つは舟のおもてに、他はともに結ぶ。両ひきつなには基から1ひろおいて枝つなを付し、その端は合わせて、舟べりの中央で漁者がにぎる。別に潟岸からは50ひろの導なわをくり出して、左舟べりの中央に結ぶ。漁者はこのなわをたぐりながら、沖合からしだいに潟岸杭のところに接近し、網はその間水底をすくって、エビは網に入る。杭に達すると、漁者はにぎっている、2本のつなを一斉に急に引いて、網を舟内にあげる。本漁法は、潟底が急傾斜した水深2.1~2.4 mの所がよく、漁期は5月から7月までで、盛期は6月。温暖静穏の日には漁獲物が多いという。本潟湖のハシカエビは、年によって豊凶がひどいので、毎年行われることはないともいう。(文献 p. 117, 図)

10. 秋田県八郎潟(干拓前)における漁法

エビの種類：スジエビ *P. paucidens*とマエビ(テナガエビ) *M. nipponense*

漁場：太古日本海の湾入した所に、雄物川のはき続ける土砂によって、海からとぎされた潟湖である。干拓以前の状況だと、北方にひろがり、周囲81 km, 面積221方 kmに及び、霞ヶ浦に次ぐ第二の大湖であった。水深はきわめて浅く、最深部でも4~5 mにすぎない。冬季は全面結氷して、人馬の通行さえ可能となった。

漁法：漬柴・えび筒・丁刃網・鮎筒網の4法がある。以下述べるところは、片岡太刀三教諭が、湖口天王町立天王中学校在職中、筆者の願いを入れて、特に執筆して下さったものである。

1) つけしば(漬柴)：この漁法は、小枝の多いしばを、径45 cm長さ120 cmぐらいの束に作り、本潟湖の西岸潟西及び浜口部落に多い漁業である。(図版1, B) 漁期は10月から翌年4月までで、水深1~2 m内外、草類の繁茂している所が好漁場で、ここで1人200~300個のしばを沈め、延縄のようにして、10~15日毎に引き揚げる。漁獲物はほとんどスジエビで、エビはしばの中にもぐっていて、舟の中で振るとぼとぼと落ちる。

2) えびどう(蝦筒)：これは霞ヶ浦から伝わったものといわれて、琴浜村・八龍村などに多い。筒は割竹ですだれ作り、それを円筒形に巻いたもので、長さ76~120 cm、口径・底径共に24~45 cmあり、口には内方に向う円錐形の落し穴を構える。筒は中央と左右の3ヶ所をなわでしばり、水平を保つように倒しY字状枝なわの両端を筒の左右につけ、枝なわは延なわの如くに本なわに幾つも結ばれる。(図版1, C, D) 漁期は春秋2期で、春は3~5月の3ヶ月、秋は9~12月の4ヶ月間、水深1.5~1.8 m内外の所で、底質はほとんど選ばない。1人のえび筒使用数は200~400個、筒の中には、米ぬかをいったものや、魚かすなどと土とを混ぜ合せて土塊となし、少量入れておく、2~4日を経て引きあげるが、漁獲物はスジエビである。

3) ちょうじん網(丁刃網)：これは現在あまり使われなくなったが、1種のすくい手網で、直径3.6~4.5 cmの半月形のわくに、8~12ひろの網をつけたもので、網の後端はひもで結び、網口には直交する60~180 cmぐらいの柄がつけてある。(図版1, A) 草類の繁茂した場所を、揚帆しながら触部に網を垂直にもって、草類をかきながら巧に前進する。舟には2~3名乗ることもあり、漁獲物は主にスジエビである。

4) ごりどう網(鮎筒網)：この漁法は潟畔全般に行なわれ、最も盛んな場所は、潟口の天王町・船越町・払戸部落などである。この筒網は構造複雑で、1袋両翼を有し、全部縶子(よりこ)網である。袋は縶子網4反で遠端は東ねて杭に結ばれ、両翼は外方に向けV字形に垂直に張り、両翼端は中と外側の3本の杭に結ばれる。なお、両翼開口部から、長さ2反の縦網が外方へ一直線に張られる。(図版1, E, F) 漁期は3月~12月まで、水深30~90 cmの砂泥地に設置する。1人の使用統数は10~30統で、漁獲物の主なるものはゴリ(ハゼ魚類)であるが、かなりのスジエビ(テナガエビ)やマエビが混獲される。

11. 青森県十和田湖における漁法

(松井・和井内の「スジエビの生態学的研究」による。)

エビの種類：スジエビ *P. paucidens* で、中井信隆によれば、明治38年(1905)八郎潟から移植され、その後も数回続けられて、大繁殖するに至ったという。

漁場：湖岸をへだたること5 m以内、水深2 m以浅のところ。

漁法：えびせん(蝦筌)による。

1) えびせん：長さ42.6 cm、胴の直径が14.3 cm、口径(外)が3.75 cm、口径(内)1.5 cm

で、1.5 cmの口はエビの入口である。松井・和井内は、内に酒かすあるいはぬかを少量混合したものを入れ、120 mのマニラロープに、このうえ(筥)を4 m間隔に30個を付し、湖岸から沖合に向かって定置して捕えたことがある。おそらく漁者の漁法もこれに似たものであろう。

12. 茨城県霞ヶ浦における漁法

(主として、茨城県水産試験場編集の「霞ヶ浦北浦漁業基本調査報告1」による。)

エビの種類：テナガエビ *M. nipponense* とスジエビ *P. paucidens*

漁場：霞ヶ浦・北浦は太古の海の名残りで、太平洋の湾入が、利根川のはき続けた砂泥によってせきとめられたもので、漁場は浦岸一円にわたる。

漁法：主に蝦筥(方言蝦樽)と笹浸で、その他に魷(はぜ)網・大徳網など。

1) えびせん(蝦筥)：形状にバライテイがある。まず、竹を割って薄く細くけずり、シュロなわ又はわらなわで、条間を4.5 mmばかりあけて、数ヶ所を編む。この竹すでもって思い思いの形に作り、その形によって、漏斗形あるいは片平状の2つの竹すでもって「あげ」(かえし)を作っとうえ(筥)と成る。うえに次の3種がある。

A型：口径12~13 cm 長さ45~54 cm, 長・中・短3個の「あげ」がつく。別に幹なわがあり、2・3・4ひろの間隔で1ひろぐらいの枝なわがつく。うえの中には少量のえさを入れ、この枝なわに結び沈めておく。最も広く用いられる。(文献 p. 198)

B型：上径23 cm, 底径27 cm, 高さ21 cm, これに10 cmぐらいの「あげ」がつく。

C型：径23~30 cm, 高さ55 cm 内外, これに12 cmぐらいの「あげ」がつく。

B・Cは水深30~60 cmの緩流の場所に沈めておく。すなわち、水底に杭を打ち、これに1~数個のうえをとりつけ、さらに杭間に高さ30~60 cmの竹すを張り立てて、エビはこのすを伝っとうえ(筥)に入る。(文献 p. 199)

2) 笹浸：長さ1.5 m内外のナラ・クヌギなどの枝を束ねる。根本から30 cmばかり上部のところをわらなわでかたくしばり、さらにそこに竹輪をはめ、長さ30 cmばかりの木くぎ2本を、そこに十文字に打ちこんでかためる。これに1ひろばかりのシュロの枝なわを付し、さらにわらの幹なわに4ひろ間隔で100個を結んで沈める。最初はしばらく浮いてるが、後で沈下する。幹なわの両端に、また100ひろをへだたる毎に、長さ3~4ひろの浮標なわを付し、ササやアシをそれに結びつけて浮標とする。1人で3延ぐらいを使用し、おだやかな日中に引き揚げる。漁夫2人がいて、1人は静に束をひき揚げ、他の1人は大きなたも網を速にその下にあって、束が舟べりにくると、束をたたいて、エビをたもに落す。漁期は年中で、盛期は5・6月から9・10月ごろまでである。(文献 p. 199)

13. 滋賀県における漁法

(「滋賀県漁具の説明」と「滋賀県漁具譜」による。)

エビの種類：スジエビ *P. paucidens* とテナガエビ *M. nipponense*

漁場：琵琶湖その他内水面で水深5 m以内の浅所。 漁法：えびたつべー名えびうえ。

1) えびたつべ：割竹を編んで円筒形・紡錘形などのかご状のものを作り、これに動物の入口を設け、**「かえし」**をつけ、一度入った動物は再び外へ出られないような構造の漁具を、一般に**「たつべ」**とか**「うえ」**と呼ぶ。エビ漁獲用のものは、円筒形で上に**「かえし」**がつく。(図版2, I) その大きさ滋賀県堅田町の例だと、高さ 14 cm 直径 21 cm。使用にあたっては、1本の幹なわに数多の枝なわをつけ、これに**「うえ」**を結びつけて水底に設置するが、漁師1人で数百ないし 300 個程度だという。**「うえ」**の中にえさを入れるが、えさにはぬか団子が最も多く用いられ、その他魚肉や鳥獣の肉骨のくさったものや、にぼしイワシやイナゴまで用いられるという。(漁具の説明 p. 71, 第 37 図, 漁具譜 p. 123, 第 23 図) 禁漁期は 7 月 1 日～9 月 30 日になっている。竹すの目に制限はない。

14. 和歌山県西牟婁郡における漁法

エビの種類：ヤマトヌマエビ *Caridina japonica* とスジエビ *P. paucidens* とヤマトテナガエビ *M. japonicum* など。

漁場：南紀州には大小数多の山岳がそびえ、その間を曲りなりにえぐって流れる大小の川があり、水は清澄そのものである。また、それらの川には長短さまざまの冷たい谷川がそそぎ、その谷川ぞいに登ると、水源近いあたりに、炭やく小屋が見られる。例えば、日置川でいうと、川口から曲折する川沿道路を奥へ(北へ)およそ 14 km 進むと、久木部落(三舞村)に着く、ここで、東北方(海拔 300 m)から南へ流れ出る、八草谷川が日置川に合する。そこを八草口という。この谷川の長さおよそ 3 km、段階状をなして流れる。所々に浅いプールがあって、そこには大小数多の岩石がころがり、流水にうたれるあたりでは音をたてる。両岸の山壁からは低木や喬木の枝葉がおおいかり、プールではドロバエが泳ぎ、多くのタニエビ(ヤマトヌマエビ)がかくれている。本流の下流にはヤマトテナガエビが川の瀬にすんでいる。

漁法：たもすくい、よせ捕り、かばし捕り、えびかご。

1) たもすくい：ヤマトヌマエビは、日中は岩や石などの下に隠れ、夜はひととき、いっせいにそこを出てえさをあさる。夜といっても、それはまじみ時で、日が暮れて、夏でいうと夕方 8 時ごろで、これ以後になると、また岩の下に隠れる。曇った日には日中でもえさをあさると、八草谷の炭やき小屋で坂口延市氏が教えた。岩上に出そろったところで、アセチレン燈をかざして、丸ぶちの浅底のたも網で、水中の岩の表面を軽く前方へ、あるいは左へ右へと、なでるようにすくいあげると、いくらでもはいる。小かごに入れて谷川縁で蓄養することもあり、炭やき小屋の前にはこの網がかけてある。

2) よせ取り：スギの葉の如き常緑樹を束にくくって、その中へえさを入れて水につける。えさはぬかをいって赤土と混ぜて団子にしたもので、枝の中に入れておく、つまり単独なしばづけ(柴漬)なのである。2～3 日すると、付近のエビがよってきて、この中に隠れているから、そこをたまたすくいとるのである。

3) かばし捕り：ぬかをいって、水でねって、それをエビの生息しておる付近に投げこむ。す

ると、石や岩の間からエビが出てくるから、これを待ちかまえて、えびたまをふせて捕える。それでこのえびたまは「ふせだま」といっている。

4) **えびかご捕り**：えびかごは、タケを裂いて円筒形に編んだもので、一端はとじてあるが、他端には漏斗形の「落し」がとりつけてある。農家の人はこれを川縁に沈めておいて、エビを自家用に捕える。かごの中には、ぬかのねったものを入れて、夜エビをさそいこむ。漁獲物はシラス(スジエビ)で、夏のころだと毎日3合も取って食べるということだ。曲折する川沿にまばらに立っている、農家の軒先にある特殊な竹かごは印象的である。

15. 高知県下における漁法

(主として、高知県水産課編「高知県内水面漁具漁法第1部」と吉本園子氏の手紙による。)

エビの種類：別に紹介されていない。吉本園子氏の高知女子大学卒業論文をみると、在学中県下の川のエビを探して、'55年4月から11月まで8ヶ月間、県下各川を、前後20方面30回にわたって歩いたが、その結果からみると、捕獲されているものはテナガエビ *M. nipponense*、ヤマトテナガエビ *M. japonicum*、ヤマトヌマエビ *C. japonica* の3種である。

漁法：えびたも、箱筌、びん漬の4つ。

1) **えびたも**：これは小型で、網口の直径9cm 深さ15cm、柄がついている。(文献 p. 11, 第3図) エビを見て、その後方に静に持って行ってエビの急に後退するを受け捕える。幡多郡下では、夜間ガス灯を用いて水底を照らし、さらに箱眼鏡をのぞいてすくい取る。漁期は夏。

2) **はこせん(箱筌)**：60×1.7cm寸の木箱の一方は細目の金網で閉鎖し、他方は細目の金網を漏斗形につけ、中央にエビの入る孔を設ける。筌口を下流に向け、川岸に近づけて水中に沈めておく。さらに、筌口に続けて石を左右に八字状に積んでエビ道をつける。漁獲物はエビやウナギなどで、箱の上にあるふたを開けてとり出す。(文献 p. 29, 図)

3) **びんづけ**：これは長さ30~45cm程度のガラスびんで、底に入口をつけ、びん口は金網あるいは布をかぶせておく。えさとして、さなぎ・酒かす、あるいは米ぬかをいり、赤土とねったものをびんの中に入れる。これを川の淵につけると、えさが水に溶けて、その香りをして魚族がびんの中に入る。この漁法は吉野川を除いて禁止されているという。(文献 p. 31, 図)

16. 福岡県における漁法

(福岡県水産試験場編「釣餌料」による。)

エビの種類：ミナミヌカエビ *Neocaridina denticulata* と思われる。

漁場：遠賀郡・嘉穂郡の山間部におけるかんがい水路。 漁法：たも網ですくう。

1) **たも網**：直径24cm、これに1.8mばかりの柄をつける。宗像郡大島浦や神湊浦の漁者はこれを持って出かけ、捕獲量13~14リットル(7・8升)から18リットル(1斗)に及ぶ。持ちかえったものは、ビール箱を改造したえさ箱に入れ小川で生かしておき、ちくじ、釣えさ料に供するという。

16. 宮崎県下における漁法

(後藤豪著, 宮崎県水産会発行「宮崎県漁具図譜」による。)

エビの種類: コエビとあり, 詳細不明。 漁場: 川口あるいは入江。 漁法: 柴漬による。

1) しばづけ: 延岡では, 長さ 76 cm のササあるいはスギの枝を束ね, 根元を径 15 cm になわでしばり, 1 ひろのほそいわらなわをつけて沈める。別に水底に多くの杭かササ竹を立て, これになわの先を 1 つずつ水面で結びつける。漁期は年中行なわれ, 1 人舟に乗って, 杭やササ竹, わらなわを伝いながら, 静にしば束を引き揚げ, 下にたも網(径 39 cm のわくに 90 cm の柄付)をあててエビを捕える。(文献 p. 160, 図)

17. 鹿児島県本土における漁法

(鹿児島県内水面漁具図譜による。)

エビの種類: 川に生息するエビであるが種名は不明である。

漁場: 別府川・広瀬川・天降川・川内川などの浅瀬, 水深 60 cm 程度まで。

漁法: 夜振り網・さで網・竹かご・えびかご・瀬しばなど。

1) 夜振り網: 竹製 1.8 m の柄に, 鋼鉄製直径 15~21 cm のわくを取りつけ, これに長さ 30 cm の袋網がついている。わくは弾力を持たせるために, 3 本の鋼鉄をよせ合わせる。漁獲物はエビの他にアユ・ウナギ・ゴイ・フナなどで, 漁期は年中, 漁場は河川全域にわたり, 夜間ランプを用い, わくの弾力性を利用して水中をかきまわす。(文献 p. 21, 第 9 図)

2) さで網: 底辺 90 cm の木製半円形わくに, 長さ 1.0 m の三角形袋網をとりつけ, 網の張りをよくするために, わくの中央から網の後端に及ぶ弧状の木わくをとりつけ, さらに竹柄を網口に渡して結ぶ。漁期は年中, 漁獲物はエビの他にウナギ・雑魚である。(文献 p. 23, 第 11 図)

3) 竹かご: 直径・高さともに 33 cm 程度の「びく」(まるい竹かご)の下部側方に「かえし」をつけたもので, かごの口はふたをして, 小なわで X 字状に結ぶ。(図版 2, H) かごを水底に沈めるために, かごの中には数個の石を入れ, さらにえさとしてタニシをつぶしたものを注ぎ, 川ぶち(淵)に沈めておく。漁獲物はエビの他にカニがある。漁場は別府川全域で, 漁期は 5~8 月, 最盛期は 6 月だという。(文献 p. 70, 第 35 図)

4) えびかご: 竹を裂きなわで編んで半円筒形のかごを作り, 底は厚目(15 cm)の板である底辺 36 cm 高さ 36 cm, 全長 76 cm, 口端に「かえし」がつき, 1 面四隅におもりとして石を結びつけ上面にシュロなわをたすきかける。(図版 2, J, K) 使用にあたっては, 夕刻川内川の中流において, 小石の多い流れの緩やかな水深 1 ひろぐらいの場所に沈めて, かご口を下流に向ける。あらかじめかごの中にはえさとして, 練りえさ(サナギ粉といりぬかを交ぜ合わす)か魚の頭あるいは獣畜の内臓を結びつける。吊しなわの下端は, たすきなわの中央に結ばれ, 上端はうき(浮子)に連なる。朝引きあげてえさを取りかえる。漁獲物はエビの他に, カニ・オイカワ・フナなどという。(文献 p. 72, 第 7 図 1~2)

5) 瀬しば: シイ・カシ・スギなど常緑樹の枝葉で, 長さ 1 m ぐらいのしば束を作り, 1.5 ひろ間隔に 10 個のしば束を幹なわに結び, 全長 16~17 ひろの幹なわの一端に浮標(タケをつけて

目じるしにする。また、しば束が水底に横たえるために、幹なわの3カ所に石のおもりをとりつける。えさとして、いりぬかをねってしば束の中心部につめ、流れにそって、川底に落ちるように構える。漁場は川内川で、漁期は4~9月、漁獲物はエビの他にカニ・ウナギなど。

18. 奄美大島における漁法

夕刻ヌカを容器に携え、それを少量ずつ川岸にまき、それを求めて出てくるヤマトテナガ *M. japonicum* やミナミテナガ *M. longipes* を、直径6 cm ぐらいの小さいたも網で巧みにすくいあげる。

II. 漁法の分類

以上述べた日本各地における、代表的漁法は、島根県下3、鳥取県下4、福井県下3、石川県下8、秋田県下14、青森県下1、茨城県下2、滋賀県下1、和歌山県下4、高知県下3、福岡県下1、宮崎県下1、鹿児島県下6の計51に達す。これら漁法は、すくい網の類、しばづけの類、うえ(かごづけ)の類その他の4つに大別できる。いずれもエビの習性を考えての漁法である。エビが夜行性で、昼間はこぞって物かげに集り、夕方からこぞってえさあさりに出歩くことに関心なくしては、いかなる漁法も成立しないだろう。

1. すくい網漁法

1) たも：小型のものは10 cm 深さ15 cm ぐらいの丸口袋網に細い柄をつけたもので、米ぬかをまき、あるいはサツマイモを口中でかみ砕いて吐き落しなどして、そこらに隠れていたエビを誘い出してすくい取る。すくうにしても、エビが後退する習性に気をつけて、たもをエビの後方に当ててかかると、うまく受け捕えることができる。

大型たも網は、鳥取県の「大えびたもすくい」、福井県の「たも」、和歌山県の「たもすくい」や「かばしどり」、高知県の「えびたも」、鹿児島県の「夜振り網」などがそれで、網口は一樣に円形である。和歌山県の山奥で炭焼く人たちが夜間灯をかざして、せまい谷川の岩上に集っているエビをすくうたもは、水中の岩面を軽く前方へ、あるいは左へ右へと、なでるようにすくいあげるのだから、網わくの針金は細く柄も短いのが特徴。鹿児島島の夜振り網は河川を強くおしまくるのだから、網わくは鋼鉄を3本もよせ合わせており、柄も大きい。

2) さで網：石川県の今江・木場両潟の「小えび前かき網」や邑知潟の「えびすくいたも網」は、網口は半円形で、底辺を水底にあてて、柄を持って手前の方にかきよせ、あるいは前方へ押して捕える。ところが、これが発達すると半円形の網口は大きく、網袋は深くなり、引くにも舟をこいで広く漁るのが、鳥取県湖山池の「もきたも」、石川県今江・木場両潟の「えびたも網」や「押たも網」、河北潟の「えびたも網」、八郎潟の「丁刃網」などがそれである。

3) えび網：これは石川県河北潟でやっているもので、うたせ(打瀬)網の小規模なものようである。さで網よりはずっと進歩した漁法である。

2. しばづけ漁法

1) 普通のしばづけ：エビが夜行性で、昼間はものかげに集る習性を利用したものである。枝葉を小さく束ねて水中に投げおく程度のものから、大束を幹なわ・枝なわを使って水底に沈めおくものまである。名称は地方によって異なる。

最も簡単な和歌山県地方の「よせ取り」で、鳥取県東郷湖の「えびづけ」、福井県の「松葉づけ」、宮崎県の「しばづけ」などは、いずれも1束ごとになわをつけて水中に投ずるもので、なわの他端は、目印しにササやタケを水底に立てて、それに結びつけておく。

このいわば単独式のしばづけ漁法は、幹なわ・枝なわを使った連結式のものに発達する。(図版1, B)。それだけに大がかりなものとなり、宍道湖の「しばづけ」、石川県邑知潟の「つけぶえ」、秋田県八郎潟の「つけしば」、茨城県霞浦の「さきづけ」、鹿児島県の「瀬しば」などがそれである。しば束も、スギ・マツ・シイ・カシ・クヌギ・ナラなどの枝葉を簡単になわで一結びしたものから、霞浦でやっているような、なわでかたくしばり、さらにそこに竹輪をはめ、長い木くぎを十文字に打ちこんでかためるものまである。束の中には、和歌山県下の「よせ取り」や鹿児島県下の「瀬しば」の如く、エビのえさをさし入れるものがある。

2) 特殊なしばづけ：樹木の枝葉を束ねることなく、水中に大量山積に沈めておき、そこにエビが隠れすむのを待って、周囲を網でとりかこみ、中のエビをおどし出して捕える。福井県でいう「松葉づけ」には2通りあって、1)にあげたのは普通のしばづけで、材料が松葉というだけのことだが、ここに出したのは如上特殊なものである。これがさらに特殊化したのが、やはり福井県下のいわゆる「ぬくみ」であって、先ず竹のすを立てて水面を広く囲みおき、杭を水底に多数方形に打ちこみ、その中へ雑木を沈めて積みあげる。大しかけのものであるから、エビだけ捕えたのではひきあわない。コイ・フナなどが集りすむようになると、後方から雑木を引きあげ竹すをせばめながらえものを一方に追いこんで捕える。

3. うえ(かごづけ)漁法

これも地方によっていろんな呼称があり、形や構造がちがいが、規模に大小の別があるが、いずれも漁具に「かえし」がついていることで、いったん入ったエビは再び外へは出られない。

1) びんつり：鳥取県東郷湖の「びんつり」(図版2, G)高知県の「びんづけ」は、大形びんのあげ底になった「かえし」がついている。漁具として特製販売されている。びん口は布をかぶせてゴムバンドでしばり、中にはえさを入れ、びん口になわをつけて水底に沈め、なわの他端を目印に立てたササかタケに結ぶ。

2) 箱せん：長方形の箱の前方側面に金網を張り、対向する後方側面にも金網を張るが、後方では中央に「かえし」をつける。高知県でやっている漁具で、水底に構えるには口を下流に向ける。

3) うえ(かごづけ)：島根県の宍道湖の「うなぎせん」や鹿児島県の「竹かご」(図版1, H)など、形は長くあるいはまるい竹かごであるが、「おとし」の位置が、宍道湖のようにかごの一端にあるもの、鹿児島県のようにかごの側面下方にあるものがある。

4) えび筒(えび筥)：竹を裂いて円筒形の筒(筥)を作り、その一端に「かえし」をつけ、これに枝なわで結び、枝なわを適当な間隔でもって幹なわにつける。(図版1, C・D, 図版2, I・J・K) 筒の大きさは下表の如く地方によって異なる。また、鹿児島県下のは円筒形のを縦割りしたかっこうのもので(図版2, J); 水底に沈めおくにしても、底面の四隅におもりをつけて安定し(図版2, K), 前者らのごとく、垂直になったり(図版2, I), 水平になったり(図版1, C)することはない。

	漁具名	筒(胴)長(cm)	口径(cm)	取付間隔(m)
八郎潟	えび筒	75 ~ 120	24 ~ 45	
十和田湖	えび筥	42.6	14.3	4
霞ヶ浦	えび筥	45 ~ 54 21 55	12 ~ 13 27 23 ~ 30	3.6~7.3
滋賀県	えびたつべ	54	24 ~ 33	
鹿児島県	えびかご	75	36	

4. その他

石川県今江潟や木場潟でやっているという「四手網」や八郎潟でやっていた「鮭筒網」(図版1, E・F)などがある。前者は網を水平に広げて水底に沈め、その上に乗るエビを一斉に引きあげる。後者は「えり」の構えを一部併用している。

5. エビ漁のえさ

エビが隠れている岩かげや石かげのまわりに、えさをまいてエビを誘い出したり、しばづけ漁業ではしば束の中にえさをさし入れたり、うえの中にえさを入れたりするが、それらえさの種類は、1) 米ぬかが広く用いられる。そのまま用い、あるいは、ほうろくでいって用うが、流失をふせぐために、水でねったり、団子にしたり、赤土とまぜてこねることもある。2) カイコのさなぎあるいはその粉末が用いられるが、多量得られないためか、いりぬかと混合して用うところもある。3) タニシやシジミをつぶして使うところもある。4) 魚の頭や肉や内臓から鳥獣の内臓やくさった肉や骨をいれることもある。

III. 参考文献

1. 石川県水産試験場 1912, 石川県湖潟内湾水面利用調査報告 第一巻(今江・木場潟之部)。
2. 第二巻(邑知潟之部)。
3. 第四巻(河北潟之部)。
4. 福井県農林部水産課, 福井県内水面漁具説明。
5. 福岡県水産試験場 1929, 福岡県の釣餌料。
6. 福島県経済部水産課 1953, 只見川水系漁業実態調査報告第一報。
7. 後藤豪 1934, 宮崎県漁具図譜(宮崎県水産会発行)。
8. 茨城県水産試験場 1911, 茨城県霞ヶ浦北浦漁業基本調査報告。
9. 鹿児島県水産部漁業調整課 1952, 鹿児島県内水面漁具図譜。
10. 神奈川県 1955, 神奈川県の内水面漁業。
11. 高知県水産課

1950, 高知県内水面漁具漁法 第 1 部 (内水面漁業制度改革資料 第三輯)。12. 松井魁・和井内貞一郎 1937, 十和田湖に於けるスジエビ *Leander paucidens* (de Haan) の生態的研究。陸水学雑誌 7 (1)。13. 農商務省 1912, 日本水産捕採誌 下巻, 水産書院。14. 静岡県水産試験場 1913, 浜名湖調査報告書。15. 水産庁漁政部漁業調整第二課 1950, 滋賀県漁具の説明 (内水面漁業資料第一輯) 16. _____ 1951, 滋賀県漁具譜 (内水面漁業資料 第十七集)。17. 鳥取県, 漁具漁法の説明。(発行年月日記入なし)

図 版 の 説 明

第 1 図版 秋田県八郎潟で操業していたエビの漁法および漁具で, 片岡太刀三教諭が秋田郡天王町立天王中学校在勤中, 筆者の願いをいれて描かれたもの (1958 年 2 月)。

A 丁刃網 (ちょうじんあみ) 漁業, 草類繁茂した場所を揚帆しながら, 草類をひきながら前進, 船尾に網を垂直に持って巧みに前進する。

B つけば (漬柴) 漁業

C えびどう (蝦筒) 漁業

D 1 個のえびどうの構造

E ごりどう (鮎筒) 網漁業

F 鮎筒網の構え, a. b 網 2 反, c 綆子 (よりこ) 網 4 反, d~f 杭

第 2 図版

G びんづり 漁業——鳥取県東郷湖

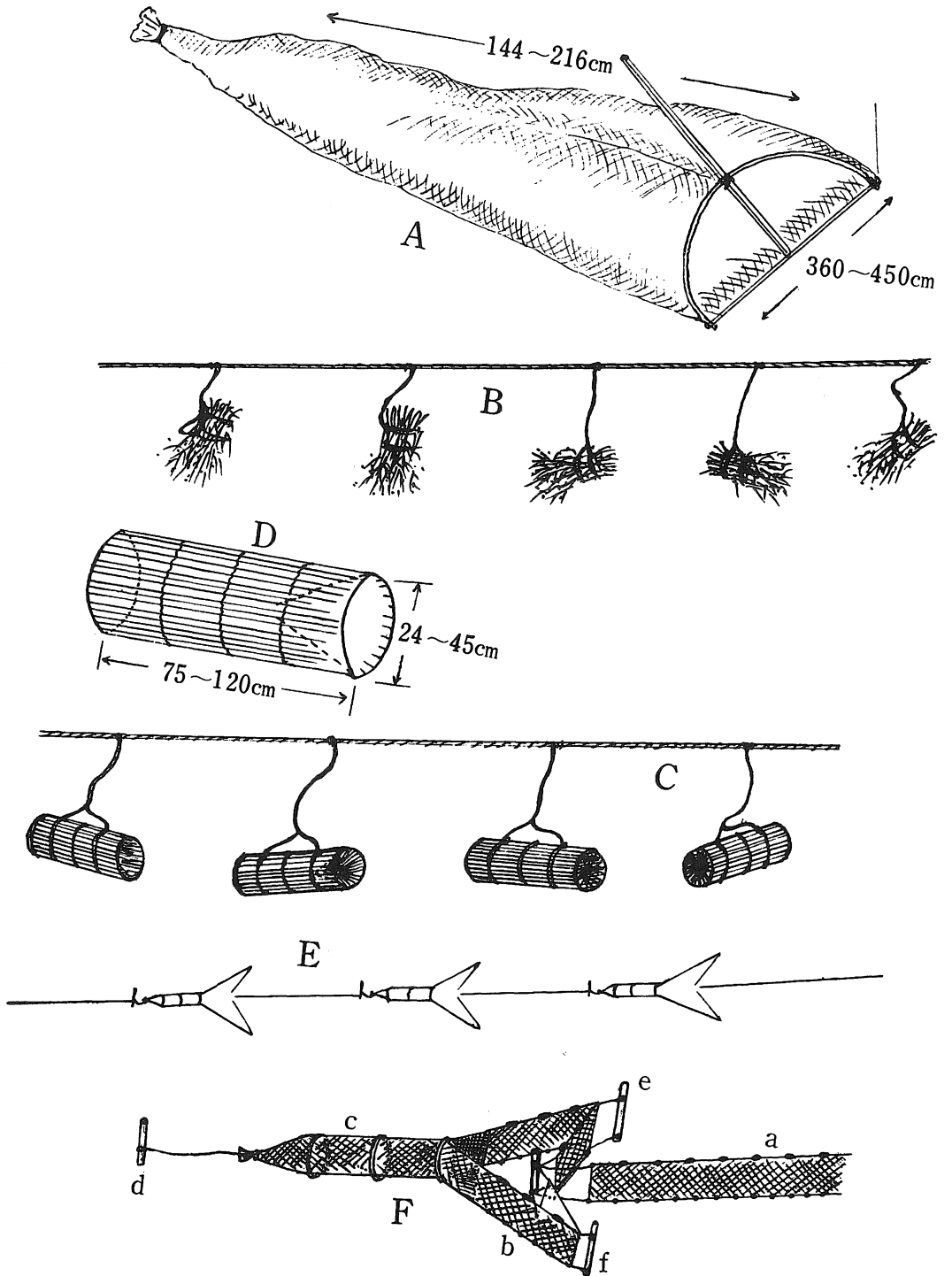
H 竹かご 漁業 (文献から模写) ——鹿児島県別府川

I えびたつべ 漁業 (文献から模写) ——滋賀県下

J えびかご 漁業 (文献から模写) ——鹿児島県川内川中流

K えびかごの構造 (文献から模写)

第1 図版



第2図版

